



## 巻頭言

### 適 応

稲 田 伸 一\*

現代は激動の時代だということは誰しも感じていることである。身近な例では、円は半年ばかりの間に30%も急騰し、戦後長い間固定されていた1ドルが360円の時代に比べて円の価値は倍にもなっている。円の価値が上ることはそれだけ日本の経済力が強くなったのかも知れないが、輸出産業はこれまで営々としてきづき上げた国際競争力を急激に失いつつあり、円高倒産が増加しつつあるという記事が紙面を賑わしている。またコンピュータ関連の分野では、LSIの急激な進歩によって、従来大型化による規模のメリットを追い求める設計思想と全く180°異った分散処理の方向が、システム設計の大きな流れとなりつつあるように思える。

このような時代に生き残るためには、個人でも組織でも環境に適応する能力を養う必要がある。……とは簡単にいっても、具体的にどうするかと問われると答は仲々むづかしい。個人の場合は、やはり身の回りの環境からの条件の変化を速く取り入れると共に、どのように環境が変化しても対応できる多様性のある能力を開発することであろう。学会のような組織の場合も事情は似たようなことになるかも知れない。ただ、学会も創立以来20年を目前にひかえ、会員も1万名を越えてくると、人間が老化すると反応がにぶくなるように学会の活動も環境適応という面から、レスポンスが鈍化していないか再検討する必要がある。

コンピュータ白書によると過去数年のコンピュータの伸びは、不況にも拘らず対前年15%(金額)前後を示している。一方学会の会員数の伸びはここ数年6~7%にとどまっている。従来、大学や企業などの組織の中でしか使われなかったコンピュータが、最近マイコンブームとかで個人のレベルまで広がったコンピュータ人口を、情報処理学会は必ずしも上手に包含していないのではないかという疑問がでる。もちろん学会の第一義目的は情報処理技術の高度な研究と発表の場

を提供することであるが、技術の教育・普及も大きな役割ではないかと思う。もちろんこの点については、学会の編集委員会でも、理事会でも何度も議論され、これが学会誌の分冊、欧文誌の発行と多様化の面に努力がなされている。

もう一つの適応の条件である、環境からの情報のフィードバックのとり方であるが、学会の場合これは会員相互間、または会員外との交流の場の増加があげられるだろう。その端的なものは各種の研究會や催物、會議などであろう。とくに冒頭にも書いたように、経済的基盤が国際化している時代には、学問・技術の国際化は益々深く広がっていく。このような環境に適応するために、国際會議へ参加するだけでなく、情報処理学会自身がこの種の會議の主催者として積極的な役割を果たすことが国外から期待されている。しかし、この点は必ずしも会員のコンセンサスがとれているようにも見えない。一方の意見は、情報処理学会の会員中心の運営をするのが本来の姿で、一部の人の趣味で国際會議に血道をあげるのは本末転倒ではないかという批判である。たしかに、国際會議を日本で起こす場合、数々の困難が横たわっていて、国内で研究会を開くようには、おいそれとはいかず、準備のためかなりの労力を必要とすることは言をまたない。しかし、私自身1980年の第8回世界コンピュータ會議(IFIP Congress 80)の準備のお手伝いをするようになり、IFIPの各国の役員の方々と話し合うようになって、好むと好まざるとに拘らず、今後日本での国際會議は増えて来るだろうし、それに適応できるよう学会の体制を考えていかないと大変なことになると痛感している。昨今のように日本の輸出が伸び過ぎ、経済力が大きくなってきたと国際的に認められてくると、学問や技術の交流の場である国際會議一つ満足に出来ないようでは、日本に対する批判が更にきびしくなってくることを覚悟しなければならない。

\* 本会理事 日本国有鉄道・情報システム部

(昭和53年8月14日)